

# 國學院大學學術情報リポジトリ

令和3年度 大学院特定課題研究の研究課題研究成果  
報告書：  
日本語学習者における自然な発話と文体の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 諸星, 美智直, 高山, 実佐, 田原, 裕子, 久野, マリ子, 竹内, はるか, 坂本, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000316">https://doi.org/10.57529/0002000316</a>

## 令和3年度 大学院特定課題研究の研究課題研究成果報告書

**研究課題**：日本語学習者における自然な発話と文体の研究

**研究代表者**：諸星 美智直

**共同研究者**：高山 実佐、田原 裕子、久野 マリ子、竹内 はるか、坂本 薫

### 研究成果

本研究は、令和元年度・令和2年度に引き続き、1. 大学院に在籍して研究活動を行う日本語非母語話者である留学生が作成する論文や研究発表の資料などの学術的文章において母語の干渉などによる誤用が現れること、2. 口頭における学術的内容の発表の際の音声にしばしば母語の環境がみられること、について、その現象をタイプ別に整理して誤用傾向に有益な指導法を見いだすための基礎的な研究である。そのために令和元年度・令和2年度と同様に日本語非母語話者である受講者の作成する日本語教育学の分野の学術的文章に特化して誤用分析のための資料を収集して検討したことが主たる研究成果である。口頭における発表の口の開き方も記録できる機材によるビデオ録画は、コロナ禍以前の令和元年度には対面式であるため可能であったが、令和3年度は、コロナ禍が続くなかで、「論文指導演習」は対面式、「日本語教育研究」「日本語教育特殊研究」はzoomによるオンラインで実施したため、オンラインの場合はzoomの録画機能によって録画できたが、対面式授業の場合は感染防止のため出席者全員がマスクをしたまま発表・質疑応答をするため、録画の目的である発話時の口の開き方の情報が得られないため録画機材を用いた録画は行わず、録音のみ行った。

#### 1. 協力者の言語歴の確認

令和3年度も、調査協力者（論文指導演習、日本語教育学研究・日本語教育特殊研究を履修の大学院生）に協力の趣旨を説明し、賛同を得た上でそれぞれの言語歴・日本語学習歴を調査した。令和3年度は10名の日本語非母語の大学院生（中国語母語話者10名）と6名の日本語母語の大学院生、および特別研究生の協力を得た。

#### 2. 留学生の学術的文章の口頭発表における発話の録音・録画と発表資料の添削

令和3年度も、令和元年度・2年度と同様に、留学生は発表の事前にPD研究員2名のうち、担当者に原稿を提出し、PD研究員は発表資料について、日本語の文法や学術的文章としての面から添削・助言をし、留学生に返送し、添削前と修正後の原稿は後述の調査

のために保管した。令和3年度は、10名の留学生の協力を得て2名のPD 研究員により、前後期を通じて授業時の発表資料の添削を行った。このほか学会発表資料・投稿論文を延べ17件、1名の博士学位申請論文の添削を行なった。

感染防止のためPDの業務は在宅勤務であったため、発表資料・投稿論文の受け取り・送付はメールに添付して行い、随時メールでの指導を行った。また、第30回国学院大学日本語教育研究会（2021年7月24日、zoomで開催）、第31回国学院大学日本語教育研究会（2021年12月19日、zoomで開催）の留学生の発表も録画・録音を行った。

### 3. 研究成果について

研究成果については、令和元年度から令和3年度に至る3年間の研究成果として、

諸星美智直・高山実佐・田原裕子・久野マリ子・竹内はるか・坂本薫（2022）『令和元年度～令和3年度国学院大学大学院特定課題研究成果報告書 日本語非母語話者の学術的文章作成のための添削指導例集（統合版）』印刷：秀飯舎

を発行し、「4、添削指導の例」において、

- (1) 表記に関する添削例3件
- (2) 文法に関する添削例60件
- (3) 語彙に関する添削例56件
- (4) PD 研究員によるコメントの例18件

を取めた。

日本語非母語話者による学会・研究会における日本語を用いた口頭発表の際の音声について、日本語母語話者と同じような滑らかな発音をするための効果的な指導のために、特に、日本語教育学・日本語学における学術用語に特化して東京語アクセントを付した語彙集の作成を作成するため、留学生の発表資料の添削、録画・録音によるデータ収集と並行して、PD 研究員を中心に日本語教育学・日本語学の事典類の項目を中心に語彙を選定する作業を行った。これを用いて言語形成期が東京である研究者のアクセントを調査する予定であったが、期間内に調査が完了しなかったため、これについては今後継続して調査する予定である。

また、令和3年度も、京阪式アクセントなどの方言アクセントの日本語母語話者が多い研究環境の日本語非母語話者による学術的文章の発音に及ぼす影響について比較するためPD 研究員による出張調査も計画したが、コロナ禍が終息せず、学会・研究会もオンライ

ン開催が継続している状況に鑑みて断念した。

#### 4. 非母語話者の学術的文章の口頭発表の発音の例

令和3年度も留学生による学術的文章は授業・研究会における発表の前にPDの竹内はるか・坂本薫の2名による添削指導を行い、指導教員による指導が行われ、その過程における学術的文章における非母語話者の誤用例については、上記報告書に収めたので本報告においては、非母語話者の音声に観察されるアクセントの特徴の一端を報告する。

なお、個人情報 considering して、学術的文章の原著者の情報を省略する。また、例文は個々の研究内容のプライオリティを考慮して、適宜書名や数字などの具体的な情報を省略して普遍的な最小の範囲に限定して掲げる。例文は発音をカタカナで表記し、文節の切れ目で1字空け、ピッチの上昇を [ で、下降を ] で示す。ピッチの上昇に音韻論的な意味はなく、具体的な音声的相を反映させた。共通語のアクセントと相違する部分に\_\_\_\_\_を付して示す。

①カ [クジョシ] セーフ [クゴ] ージワ ニ [ホンゴノ] ハ [ナシコ] トバニモ カ [キコ] トバニモ タ [ス] ー シ [ヨーサレテ] イ [マ] ス (格助詞性複合辞は日本語の口言葉にも書き言葉にも多数使用されています。)

カ [クジョシ] セーフ [クゴ] ー ジオ タ [イショーニスル] ケ [ンキューワ] オ] ー タノチ [クセキガ] ア] リ ヨ [ーレ] ーオ ブ [ンセキスル] タ] イショーワ ショ [ーセツヤ] カ [イワ] デ [ンシテキストカサレタ] モ [ノニ] マデ ヒ [ログアッテ] イ [マ] ス (格助詞性複合辞を対象にする研究は多くの蓄積があり、用例を分析する対象は小説や会話・電子テキスト化されたものにまで広がっています。)

②チュ [ーゴクゴニ] オ [ケ] ル ノ [ーガンド] ーシト [ワ] カ [ノー] ガ [ン] ボー ヒ [ツヨーオ] ア [ラワ] ス ヒョ [ーゲ] ンデスガ ニ [ホンゴニ] ヤ [クス] バ [アイ] カ [ノーオ] ア [ラワ] ス ラ [レ] ル デ [キ] ル ガ [ンボーオ] ア [ラワ] ス タ] イ ヒ [ツヨーオ] ア [ラワ] ス ナ] ケ レバナ [ラナ] イ イ] ガイ ジ [ドーシニ] ヤ [クサレル] ト [ユー] ム [ヒョ] ー シキヒョ [ーゲ] ンモ タ] タ ア [ラワレマ] ス (中国語における能願動詞とは、可能・願望・必要を表す表現ですが、日本語に訳す場合、可能を表す「られる」「できる」、願望を表す「たい」、必要を表す「なければならない」以外に、自動詞に訳されるという「無標識」表現も多々現れます。) (中略)

〇〇〇〇ガ セシ キユーヒヤクネンニ シュッ パンシタ 『〇〇〇〇』デ ペ キンカンワキョー イクノ ソー キニ オ] イテ ナ イヨージョーモ ケ シキジョーモ メ ズラ シク ト トノエラ レタ キョ カシヨ デア ルト イ ワレテイ マ ス (〇〇〇〇が1900年に出版した『〇〇〇〇』是北京官話教育の早期において内容上も形式上も珍しく整えられた教科書であると言われてています。)

③ソ [ノ ケツ カ カラ ワ 〇〇 ガタノ タ イショーニ カ ンスル ジョ ホーオ ガ クシューシャニ テ ージスル コト ガ コ ノ タ イ ブノ ド ケーゴニ オ ケ ル ゴ ヨーオ ヘ ラスニ ワ コ カテキデア ル コトオ シ メ シテ イ マ ス (その結果からは、〇〇型の対照に関する情報を学習者に提示することがこのタイプの同形語における誤用を減らすのに効果的であることを示しています。)

④シ タガッテ コ ンカイワ コ ロナカニ オ ケ ル ニ ホンゴキョー イクノ インター ネット ジューギョーオ ブ ンセキシマ シタ (従って、今回は、コロナ禍における日本語教育のインターネット授業を分析しました。)

ソ [ノ ウエ デ インター ナ イト ジューギョーノ モ ンダ イテンオ ア キラカニシ ソ ノ モ ンダイノ カ イケツホ ホーニ ツ イテ コ サツシマ シタ (その上でインターネット授業の問題点を明らかにし、その問題の解決方法について考察しました。)

⑤ビ ジネスニホンゴブ ンショノ ゴ イ ワ イッ パンテキナ ニ ホンゴ ト ワ ソ ニスル ト クシヨクガ ミ ラレ ルノデ 〇〇ゴ ノ コ ロケ ーションオ チョ ーサシ ビ ジネスニホンゴブ ンショノ ゴ イニ セツ シヨクシハジメ ル ニ ホンゴガクシュ ーシャニ トッ テ ヒ ツヨーデア ルト カ ンガエラレ ル フ クシトシテ イ カノ 〇〇ゴ オ セ ンテイシマ シタ (ビジネス日本語文書の語彙は、一般的な日本語とは相違する特色が見られるので、〇〇語のコロケーションを調査し、ビジネス日本語文書の語彙に接触し始める日本語学習者にとって必要であると考えられる副詞として以下の〇〇語を選定しました。)

⑥ソ [ノ テ ンカラ ミ ルト ホ ンショーワ キョ クタンナ イッ サ

ツデア]ルト　　イ [エマ] ス (その点から見ると本書は極端な一冊であると言えます。)

サ [クシャガ　　イ [トーテキニ　　コ [ノ　　ヨ] ーナ　　マ [ニユアルホンヲ　　ツ

[クッ] タノカ　　ソ [レト] モ　　タ] ンナル　　グ [-ゼンナ] ノカ　　イ [ズレニ

シテ] モ　　ホ] ンサツワ　　コ] ンカイノ　　コ [-サツタ] イショーノ　　ナ] カデ

モッ [ト] モ　　ト [クシュナ　　イツ [サツ] デアルト　　イ [エマ] ス (作者が意図

的にこのようなマニュアル本を作ったのか、それとも単なる偶然なのか、いずれにしても

本冊は今回の考察対象の中で特殊な一冊であると言えます。)

